



Shika Town

1

2021
(令和3年)

No.185

志賀 ころ柿

志賀名産



INDEX

	ページ
2021年 年頭あいさつ	2～3
能登志賀ころ柿	4～5
確定申告・町県民税申告	6
まちかどNews	12～15
情報パーク	16～21



自治体広報紙配信
アプリ「マチイロ」
インストール
はこちら

新型コロナウイルスの収束と 東京五輪・パラリンピックの 開催を願って



謹んで新年のご挨拶を申し上げます
町民の皆さまには、輝かしい新春を
お迎えのことと、心からお慶び申し上げます

志賀町長 小泉 勝

年頭にあたって

昨年は、新型コロナウイルス感染症という未知なるウイルスに翻弄された年でした。

一時は、緊急事態宣言が発令され、不要不急の外出や都道府県をまたぐ移動の自粛、休業や営業時間の短縮の要請がなされ、本町でも、小中学校の臨時休校をはじめ、文化・スポーツ施設などの休館や利用の自粛、会議や行事・イベントなどの延期または中止の対応をとるなど、私たちの日常生活をはじめ、社会経済活動に大きな影響を及ぼしました。

現在、全国的に感染が広がっていますが、今年は、1年延期となった東京2020オリンピック・パラリンピックが開催されます。

大会は、感染防止対策を徹底したうえで、7月21日のソフトボールを皮切りにスタートし、連日、各競技で熱い戦いが繰り広げられ、世界が熱狂し、歓声の渦に包まれることと思います。

本町では、開幕に先立ち、男子レスリング競技のアゼルバイジャンとジョージア、2カ国の代表チームの直前合宿を受け入れる予定であり、今後、最終の準備を整え、万全の体制で受け入れをしたいと考えています。

新型コロナウイルス感染症が1日も早く収束し、東京オリンピック・パラリンピックが無事開催され、これを契機として、日本経済が回復し、さらなる

成長につながっていくことを切に願うものであります。



令和元年7月に受け入れた事前合宿

コロナ禍における 支援施策の実施

町では、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、大きな打撃を受けた中小企業や個人事業主をはじめ、厳しい状況に置かれた町民の皆さまを支援するため、これまでに、国県の支援制度に加え、町単独のさまざまな支援施策を講じてきたところです。

事業者向けの支援としては、県の休業要請に応じ、同等の内容で協力しました。が、県の協力の支給対象とならなかった事業者に対する「新型コロナウイルス感染拡大防止協力金」をはじめ、テイクアウトなどの新たな販路拡大に取り組む事業者に対する「中小・小規模事業者等持続化補助金」、対象期間の売

上げが対前年比で30%以上50%未満減少した事業者に対する「中小企業等緊急支援給付金」などを実施してきました。

また、個人向けの支援としては、国の10万円の給付に合わせて、町民一人あたり一律2万円を支給する「特別定額給付金給付事業」をはじめ、国の給付金の基準日より後に生まれた新生児にも10万円を給付する「新生児応援特別給付金事業」、町外で頑張っている本町出身の学生を支援するため、志賀産米のコシヒカリ、200グラム入り72パックを送る「ふるさと志賀産米学生応援事業」などを実施しています。

さらに、経済対策を兼ねて、5千円で倍の1万円分の食事券として利用できる「プレミアム食事券」、1万円円で1万2千円分の買い物ができる「プレミアム商品券」の発行事業なども実施してきました。

町では、今後も、状況に応じ、適宜、効果のある事業を実施していきたいと考えています。



志賀産米コシヒカリのパックご飯

企業誘致の推進

能登中核工業団地においては、昨年11月、マスク製造の(株)ミンラックが、埼玉県から本社を移転して操業を開始しました。

投資額は約6億円、従業員数は66人で、月間3万枚の不織布マスクを製造し、大手ドラッグストアのプライベートブランドとして出荷されることになります。

コロナ禍における世界規模でのマスク需要が続く中、同社には、メイドイン志賀町の高品質なマスクを、国内はもとより、世界に向けて供給し、大きく飛躍されることを期待しています。

また、堀松工場団地においては、同じく昨年11月、電子部品製造販売のサンケン電気(株)が、グループ会社の石川サンケン(株)にサンケンオプトプロダクツ(株)を本年4月1日に統合させ、新たに最先端技術を集約した国内有数のパワーモジュール生産拠点として整備することを表明しました。

加えて、同敷地内に、サンケン電気本社以外では国内初となる「ものづくり開発センター石川分室」を併設し、グループ全体の新製品や新規生産ラインの開発をはじめ、ITを活用した生産性の改善を研究していくこととしています。

今後2カ年で約35億円、次の3カ年で約50億円の巨額の設備投資が行われる計画であり、本町にとって、大きな

経済効果が生まれるものと期待しているところです。

町では、引き続き、県と連携しながら、これら企業も含めた既存企業に対して、できる限りの支援をしていくとともに、新たな企業誘致にも取り組み、雇用の創出と地域経済の活性化を図っていきます。

若者の移住定住の促進

若い世代の移住定住を促進するため、の住宅地「みらいとうぶ」については、市街地や小学校に近い便利な立地と充実した奨励金制度の効果もあって、全79区画のうち、75区画が分譲済となり、残り4区画となっています。

現在、町外から25世帯、57人が移

住され、町内から転居された43世帯、187人と合わせて、68世帯、244人の方が定住されており、人口減少の抑止に大きな効果があったものと考えています。

また、このみらいとうぶの分譲により、民間事業者が、隣接する土地を開発し、分譲を開始することにもつながっています。

折しも、新型コロナウイルスの感染拡大により、企業におけるテレワークやリモート会議など、遠隔地での勤務も可能な働き方が普及し、これが追い風となり、地方への移住の関心が高まっているところでもあります。

町では、この機会を捉え、新たな用地を確保することができれば、さらに住宅地を造成し、分譲していきたいと考えています。

公立保育園の統廃合

志賀地域の公立保育園の統廃合については、児童数の減少に加え、保育環境の充実を民間の力を活用して行っていくという国の方針のもと、自治体に対する保育園の建設・運営にかかる補助金が廃止された中で、すばる幼稚園が令和4年4月に、みらいとうぶに隣接する場所に新築移転する計画であることが示されました。

これを踏まえ、町では、昨年9月の議会定例会において、施設の老朽化が著しい土田保育園を令和3年度をもって休止し、その後、児童数の推移を見ながら、できるだけ早い時期に中甘田保育園を休止し、将来的には、志賀地域の公立保育園を高浜保育園1園にしたいという方針を打ち出しました。

そのうえで、昨年10月末に、土田保育園の保護者の皆さまに対して説明会を開催し、これまでの保育園統廃合の経過や今後の児童数の推移、休止の理由などについて、説明させていただいたところです。

町としては、この方針に基づき、今後、保護者の皆さまに丁寧の説明していくとともに、すばる幼稚園とも連携しながら、さらなる保育環境の向上に努めていきたいと考えています。

結びにあたり、町民の皆さまのご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げ、新年のごあいさつとします。

令和3年 元日



新しい住宅地が形成された「みらいとうぶ」

能登志賀ころ柿

能登志賀ころ柿とは

品種「最勝」を原料とした干し柿で、果肉がようかん状でやわらかく、鮮やかなあめ色が特徴です。



農林水産大臣登録 第20号

平成28年10月に、地理的表示保護制度(GI)に登録されました。

「地理的表示保護制度」とは、伝統的な生産方法や気候・風土・土壌などの生産地の特性が、品質などの特性に結びついている産品を知的財産として登録し、保護する制度です。



石川県ふるさと認証食品

平成12年3月認定

石川県産の農林水産物を主な原材料として製造された加工食品や石川県に古くから伝わる伝統技法を用いて製造された加工食品で、県がその品質や表示について一定基準に適合していることを認証している食品です。



未来につながる「能登」の一品

平成27年3月認定

里山里海で磨かれた、えりすぐりの食品を、未来につながる「能登」の一品として認証しています。



志賀町優良特産品

平成27年12月認定

郷土色豊かで、他の地域にはない個性的な魅力を持つ特産品で、味・独自性・製法・材料などが優れた商品を厳選し認定しています。



11月30日(月)、金沢市中央卸売市場で「能登志賀ころ柿」の初競りが行われ、12個入り1箱(1キロ)が過去最高の25万円で競り落とされました。
志賀町の特産品として、また軒下に吊るされた柿が並ぶ村の風景は冬の風物詩として、かかせないものとなっています。

「ころ柿」のおこり

加茂村、下甘田村、中甘田村周辺（現・志賀町）では藩政時代より、函屋柿、長太郎柿、モチ柿などの柿があり、大正年間には、近在の市場はもとより、遠く大阪まで出荷されていました。

大正11年、「吊し柿」の特産地を目指し、下甘田小学校へ愛知県安城市から講師を招き、接木講習会を行い、これを契機に柿が増殖されました。中でも「函屋柿」の中の「葉ノ下」と呼ばれる柿が増やされ、数年後には「最勝」と命名されました。

昭和7年ごろ、硫黄くん蒸の技術を導入したことで、かびの繁殖が抑えられ、柿も黒々としたものから、あめ色に仕上がりに「ころ柿」が誕生しました。

昭和30年ごろより、技術講習会などを開催して産地化に乗り出し、昭和31年2月、伊勢神宮の豊稷祈年祭で、全国農林産物品評会委員長賞に輝き、全国的に「ころ柿」の名が広まることになりました。

参考資料

『石川の農村を支えた人びと』石川県農村文化協会
（石川県教育委員会）



ころ柿ができるまで

春



せんてい
剪定

陽あたりの良さと収穫のしやすさを考えて枝を整えます。

夏



てきか
摘果

形の悪い実を取り除き、葉20枚に1個程度に整えます。収穫まで何度も行います。

秋



下草刈り

年間5〜6回程度、柿の木の下の草刈りを行います。

― 摘果・下草刈りを繰り返す ―

冬



収穫

よく色づいた順に収穫します。

主な加工作業

① へたとり・皮むき

果実形状に合わせてへたを取り、皮むき機を用い、へたから果頂部（先端部）まで丸く、なめらかな曲線になるように皮をむく。

② 糸くくり・硫黄くん蒸

1本のひもの両端に果実をくくりつけて竹竿などに掛けて吊す。くん蒸箱に糸くくりの終わった果実を入れて、硫黄を燃やしてくん蒸する。

③ 自然乾燥

干し場で、風通しをよくして乾燥させる。

④ 手もみ

果実表面が乾いてきた段階で、果実を手もみする。

⑤ 包装・箱詰め

1個ずつ包装し、箱詰めする。

